

---

---

# 九州産業考古学会報

---

---

第5号 2005年10月31日発行 発行元：九州産業考古学会

---

## 九州で産業考古学を学ぶ 事務局長就任挨拶

青地学（雇用・能力開発機構）



**3**年前に就職して、最初の赴任先という縁で、九州で生活することになりました。日本の近代化を力強く支えた北九州への関心は以前からありましたので、こちらで生活できることを幸運に思っております。縁あって生活する土地への理解と愛着を持ちたいと思い、また出身大学の先生の紹介もあり、九州産業考古学会へ入会させていただきました。

八幡職業能力開発促進センターに配属されましたが、北九州の地理に慣れてきた頃、かねてから先生が遠賀川と洞海湾を結ぶ堀川の現状に関心を示されていたことから、私はまずこの堀川を実地に調べることにしました。総会でも報告しましたが、堀川は筑豊で産出された石炭を北九州へ輸送するのに活用された人口河川で、地図で調べると自宅から近いことが分かり、サイクリングを楽しみながら実地を見て回りました。それが縁で、堀川の再生を願う地元住民の集まりに参加することになり、今年も清掃のイベントでは記録係として、川底のヘドロに足を取られたりしながら写真撮影を行いました。

その後も当会の先輩方のお誘いで、筑豊や三池さらには唐津などの炭鉱の遺構を見て回ることができ、関西出身の私にとってはどこもが非常に印象深く、労働というものを改めて考える契機にもなりました。

今年の5月には初めてドイツを旅行しました。当初の予定では大部分の時間をミュンヘンに滞在して、ドイツ博物館をじっくり楽しむつもりでしたが、到着初日に宿が取れないために、夜行列車に飛び乗ってルール地方へ向かうことになりました。おかげでデュイスブルグにある製鉄所跡の野外博物館を中心に、ルールでゆっくり過ごすことになりました。ここは予期した以上に素晴らしいところで、製鉄所高炉の上でサンドイッチを食べながら、宿が取れなかったためとはいえ、不思議な運命の力を感しました。

この他にも、九州産業考古学会に入ったお蔭で数々の素晴らしい出会いがあり、また先輩方の紹介で魅力ある産業遺産の世界が広がっていくのを実感しています。このたび図らずも、当学会の事務局長に就任することになりました。経験も実力も乏しい若輩ですが、スタッフとともに、産業考古学の魅力を発信していきたいと思えます。御協力御指導のほど、よろしくお願いたします。

## 【研究発表】

### 動態保存されている農用小型木炭ガス機関 小林式サクシヨンガス機関

池森寛（西日本工業大学）

#### 1. はじめに

このエンジンは、香川県綾歌郡綾南町の発動機愛好家・杉山清氏所有の農工用小型ガス機関である。図1のように完全な形でガス発生機と専用のガス機関がセットで動態保存されている例は、筆者の知る限りおそらくこの1台だけである。2003年徳島大学で開催された日本機械学会の催しで、初めて現物に触れることができたので、構造を中心に調査の概要を報告する。

#### 2. ガス機関の概略史

わが国におけるガスを燃料とするエン

ジンの歴史は古く 1882(明治 15)年オットーガス機関(英国・クロスレー社製)を工部大学校(東大工学部の前身)が購入し使用したことに始まる。

その後、少し遅れて輸入された石油機関と競う形で、明治・大正期まで溶鉱炉や、コークス炉ガスが容易に手に入る所や、石炭ガスや都市ガス設備のある場所、さらには天然ガス産地等で、発電用やプラント用等の原動機として利用された。国産化も 1897 年の池貝鉄工所に続き、発動機製造(株)、新潟鉄工所さらにはサクシヨンガス製作所、伏田鉄工所等数社で製造された。

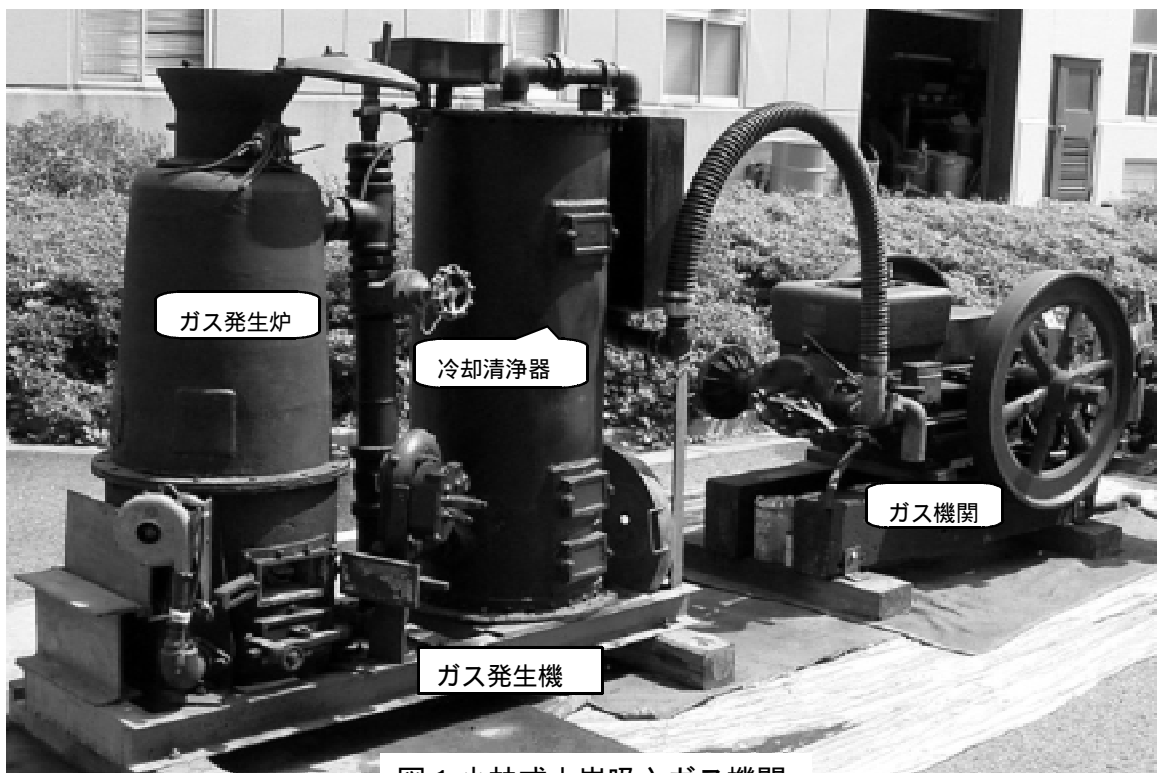


図 1.小林式木炭吸入ガス機関

燃料の経済性で有利であったガス機関も、石油機関に比べると、ガス発生機を設けなければならないことや、操作が容易でなかったために液体燃料の利便性には敵わなくなり、次第に石油機関その他にその座を奪われていった。この時代までのガス機関は大工場用で、農業用には利用されなかった。農業への発動機の利用は大正半ば頃から始まるが、それらは小型の石油機関であった。

しかし、太平洋戦争前頃になると液体燃料はほとんど軍用となり、農業用・製材用あるいは織物工場用等の燃料が不足し、代替燃料として木炭ガスや薪ガスに注目が集まった。その結果、これらに対応したガス発生機が研究され、ガス機関が復活する。さらに移動式発生機も考案され木炭自動車なども登場することになる。

政府も木炭ガス発生機の使用を奨励し、1934(昭和9)年の商工省に続き1937年には農林省が、約半額の奨励金を交付し、性能試験も行われた。

この頃製造された小型木炭ガス発生機には1929年開発された浅川式を始め、白土式、燃研式、三浦式、陸式(薪)、小林式、鈴木式、理研式、山根式等があった。

農業用への利用の方法としては、これらのガス発生機を手持ちの石油機関(石油発動機)につなぎ運転するのが一般的であった。石油に比べ燃料費軽減、排ガス浄化、振動軽減などに利点があったが、出力は2/3程度に過ぎなかった。石油と同等の出力を出すためには、圧縮比増、点火時期早期化、回転数増、吸気弁バネの弱め等の改良が必要であった。このため初めから木炭ガス発生機に適した専用のガス機関を製作するメーカーが現れ、それが小林式と三浦式であった。また少し遅れて内田式等も出てきた。

本報告が着目する小林式は、このような時代背景のなかで生まれたガス機関であった。すなわち、この機関は、戦争による液

体燃料欠乏の時代に、木炭ガス利用に応じて開発されたガス発生機と専用のガス機関が良くマッチした農業・小工業用の原動機として活躍した。

しかし、戦後になると液体燃料が豊かに使用できるようになり、石油機関、重油機関、ガソリン機関の台頭によりこの種のガス機関は消えていってしまった。

### 3. 木炭ガス用サクシオンガス機関とは

この機関は、木炭等の燃料をガス発生炉で不完全燃焼させ、一酸化炭素 CO を主体とする可燃ガスを発生させ、これを冷却器で冷却し、さらにろ過して適量の空気と混合し、機関の吸気行程でシリンダー内に吸入し、燃焼させる原理をもつ。すなわち、ポンペに貯めたガスを吸い込むのではなく、エンジンの吸込力を利用してガスを発生させる仕組みであり、このためサクシオン(吸入)ガス機関と呼ばれる。

一般にガス機関は、ガスを発生させるガス発生炉、そのガスを冷却・ろ過する冷却浄化器、およびガス機関からなる。また、発生炉には、木炭加熱時に少量を給水し水蒸気を木炭ガスに混入させる湿式と、まったく給水しない乾式とがある。

### 4. 小林兄弟鐵工所

小林式サクシオンガス機関は、広島県的小林秀太郎が考案したもので、大阪の中央貿易合資会社で販売されていた。

製造会社である小林兄弟鐵工所は、1883(明治16)年農機具製造工場として発足、1924(大正13)年頃から石油発動機およびガス機関を製造した。1951(昭和26)年資本金80万円の小林内燃機工業(株)となり、石油発動機と動力薪割機を製造した。木炭ガス発生炉、石油発動機、動力薪割機の特許なども所有していた。1954年当時で、所在地は広島県芦品郡網引村(現同郡新市町)下安

井、従業員 50 名であった。これ以上のことは現在不明である。

図 2 はこの機関の側面にある銘板である。



図 2 エンジンの銘板

## 5. 小林式サクシオンガス機関の構造

この装置は定置式で、図 3 のようにガスを発生する発生炉 A と発生したガスを冷却浄化する冷却清浄器 B、さらにガス機関 C の 3 つで構成され、互いに連結されている。

ガス発生機(ガス発生炉 A と冷却清浄器 B)

ガス発生炉は、湿式上向き通風式で、木炭はもちろん、コークス、無煙炭あるいは鋸屑なども使用できると言われている。

ガス発生炉は円柱形の鋳鉄製で、その中に耐火粘土が塗られている。さらに給炭口は上部が開閉でき、蓋を開けて炭を入れる。

冷却清浄器上部にある水槽には常に水が蓄えられている。この水は、清浄器内へ、ガス発生炉底部へ、さらに、エンジンシリンダー冷却水へと 3 方向に給水される。

清浄器内の水は内部のコークス層へ散水される。炉内から吸引された高温ガスがこの層を通過上昇する時、粉炭および塵埃などの不純物が濾過され、同時に冷却される。

さらに上部で再度冷却され、ガスは濃縮されて熱量の高い有効ガスとなりガス機関に送られる。この方法は効果があったが、ただ寒冷地では冬期凍結の恐れがあり、運転停止後には直ちに排水するか、適当な不凍結処置をしておく必要があった。

ガス発生炉の方は一般の湿式のものと同様であるが、特徴としてはガス通管の一部を分岐して、図 3 の 8 のように水溜の中へ挿入してある。これらは何らかの原因で、炉内または清浄器内でガス爆発が起こったときの安全弁の役目をする。

## ガス機関C

杉山氏所有のこのガス機関は、横型単気筒の 4 ストロークエンジンで、出力 12 馬力、回転数 460rpm で、岡山県で製材用に使われたものである。製造年は不明であるが、おそらく 1935(昭和 10)年頃と思われる。

このガス発生機専用のエンジンは、最大 40 馬力まで生産され、前述のように圧縮圧は高圧縮(10.5 ~ 12kgf/cm<sup>2</sup>)に設計されている。また、始動を容易にするために低圧縮で起動できるように減圧レバーが取り付けられてあり、一定運転になると高圧縮に切り換えることができる。さらに点火プラグの火花ギャップは普通のものより狭く 0.6 ~ 0.8mm にしてある。

この装置は国内のほか戦時中満州でもよく使われ、採金機械や精米機械等の原動機として 5 ~ 15 馬力が使われたようである。

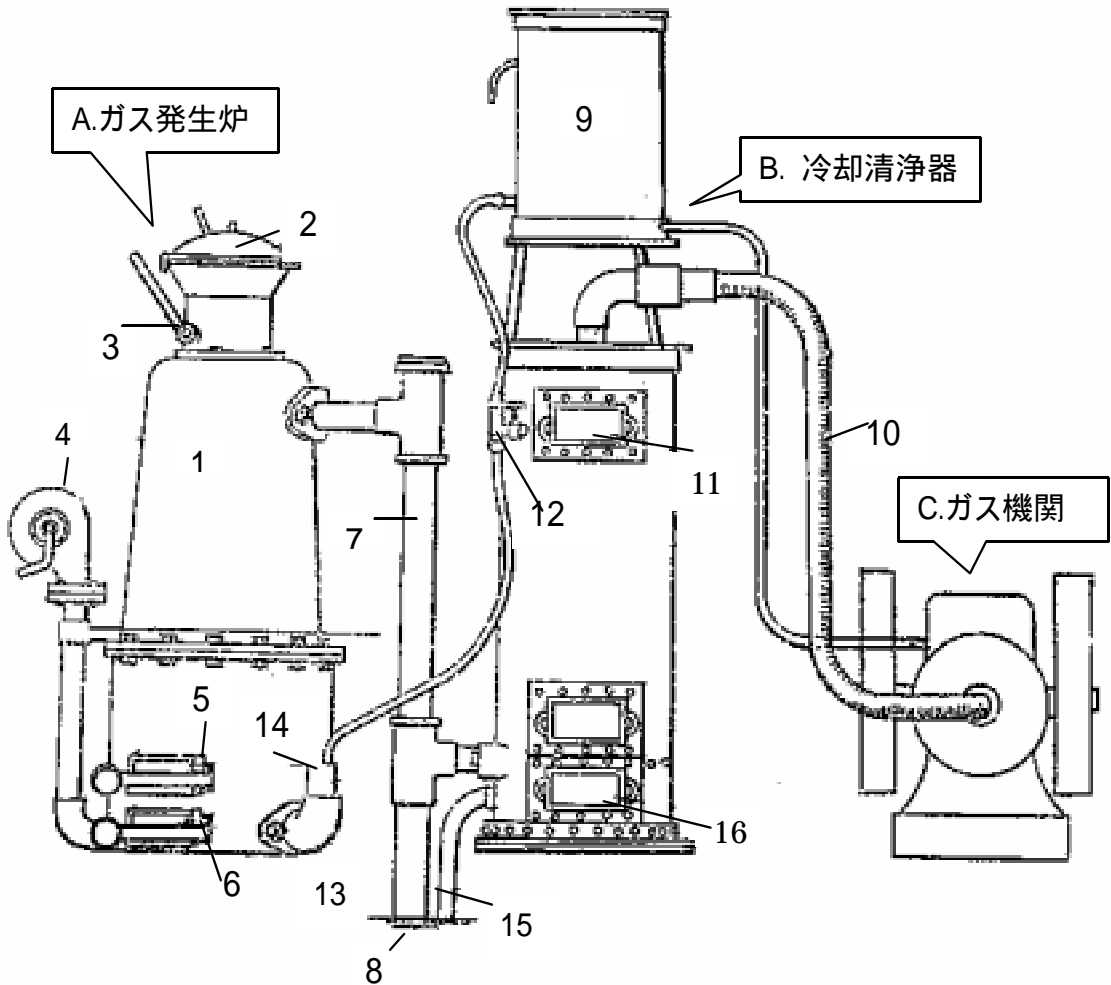
## 6. 最後に

木炭サクシオンガス機関は、戦争による石油燃料欠乏時代に苦肉の策として生まれた感があるが、政府の奨励もあり多種多様の装置が作られ、当時の民需産業の動力を廉価で賄える原動機として利用された。しかし、如何せん始動までに要する時間・手間さらには戦後の豊かな石油事情のために消えてゆかざるを得なかった。この機械は

この時代を象徴とする産業遺産といえる。

なお、現在木炭ガス機関はなくなったが、天然ガス等を使うガス機関は、環境負荷が  
少ないエンジンとして注目されている。

参考文献)本岡玉樹:木炭ガス機関に就いて、  
大陸科学院報告 1937(昭和12年)外。



- |  |
|--|
| 1. ガス発生炉、2. 給炭口蓋、3. 開閉弁、4. 送風機、5. 火口、6. 灰口、<br>7. ガス通管、 8. ガス管出部水槽、 9. 給水槽、 10. ガス通管 11. 洗滌水弁<br>12. 給水弁、 13. 空気・水・供給孔、 14. 漏水孔、 15. 洗浄水・排水孔、<br>16. 監視孔 |
|--|

図3 小林式吸入ガス機関の構造

## 【報告】

### 2005年度総会および見学会

松田寛（前事務局長）

去る5月28日(土)、佐賀市において年次総会を開催し、あわせて研究発表会、見学会を行いました。参加者は午前の見学会が11名、午後の研究発表会・総会が14名でした。

見学会は、山本長次氏（佐賀大学）にセットして頂きました。まず最初に訪れた「佐賀市歴史民俗館」は「旧古賀銀行」の建物を活用したもので、大正時代の洋風建築の様式を今に残す貴重なレンガ建築物です。古賀銀行は、両替商をしていた古賀善平が明治18年に設立した銀行で、大正中期には九州の五大銀行のひとつに数えられるまでに発展しましたが、大正末期の金融恐慌により廃業になり、その後は商工会議所、労働会館として使用されていたのが、近年に歴史館として再生されるにいたったものです。次に「旧三省銀行」は明治15年に設立された銀行ですが、開業当時は米相場取引を主にしたようで、建物の様子も一般町家風ですが、独特のムクリのある切妻屋根や銅板の窓に特徴があります。



写真1 佐賀市歴史民俗館

「旧福田家」は大正時代に建設されたもので、玄関からすぐ右手にある応接間では、ステンドグラスの窓やシャンデリアなどに、近代和風建築の髓を極めた趣が堪能されます。最後に行った「佐賀城本丸歴史館」は、本丸御殿の一部を復元した巨大な木造建築で、去年開館したばかりですが、遺構を活用した作りになっていて、当時が偲ばれます。

午後の総会は、スタートが遅れましたが、佐賀大学の外郭施設である「ゆつつらーと佐賀」のホールで開催されました。最初に山本先生の記念講演「佐賀県の近代化遺産について」が行われました。佐賀市内に多くの産業遺産が残り、市当局による整備が進んでいることに感銘を受けました。次に研究発表として、市原猛志会員が「地方都市における産業観光の可能性」を、水田丞会員が「鹿児島紡績所建物の実態」を発表しました。

最後に総会を開いて、今回は役員改選と会則改正（別掲）が行われました。木元会長は留任し、大石道義会員が新設された副会長に、また事務局長には青地学会員が就任しました。清水恵一会員が新しく役員に加わることも了承されました。総会終了後に恒例の懇親会をもちました。佐賀市での見学会は初めてでしたが、遠くは鹿児島市からの参加者もあって、楽しく有意義なものとなりました。山本先生や関係者の皆様に御礼申し上げます。





## 【報告】

### 折尾界隈の鉄道史を見る

砂場一明（会員）

北九州市八幡西区の折尾には、石炭を水運していた時代の名残である堀川運河をはじめ、三好炭鉱の遺跡など石炭に関わる産業遺産も多い。この度（2005年3月）会員有志は、ここ折尾における鉄道の歴史と、駅構内配線の変遷などの視察を企画し、鉄道史学会の大塚孝氏（鉄道友の会九州支部事務局長）に案内をお願いして、現地見学会を実施した。



写真1 JR九州折尾駅

JR折尾駅は構造も複雑であるが、開業の経緯も複雑な駅である。明治24年（1891）に、東西に走る九州鉄道と南北に走る筑豊興業鉄道が相次いで開通し、交差する遠賀郡の一寒村に両社が各々駅を設置し、駅名を村名の“折尾”とした。4年後には不便を解消するためか二つの駅舎は統合され、1階を筑豊鉄道（筑豊興業鉄道を改称）、2階を九州鉄道が使用する日本初の立体交差駅として新たに開業している。今の駅舎は大正5年（1916）同地に建て替えられたもので、大正ロマン漂う風格ある建物である。

路線バスやタクシーで混み合う駅前の広場を挟み、かつてJRと対峙するように西

鉄北九州線の“折尾停留場”があったが、不採算路線に陥り平成12年（2000）11月に廃止されている。停留場とはいえ、元々は大正3年に開通した九州電気軌道の終端ターミナルとして建設されたもので、当時は路線を福岡市まで延長する計画もあったようだ。

赤煉瓦積み of 土台に建てられた高架停留場跡地には、二連・三連アーチ架道橋・橋台・床台（ホームは撤去されている）などの遺構があって、開業当時の偉容を今に伝えている。中でも国内最大級といわれる“ねじりまんぼ技法”の架道トンネルは、現役の道路として利用されており、内壁の美しさは圧巻である。



写真2 西日本鉄道架道橋

JR沿いに歩くと、懇切な説明がなくては存在さえ気付くことのない鹿児島・筑豊両本線の接点を記すキロポスト、「鉄道用地」と刻字された古い境界標、道路改良のため廃止された踏切、中層住宅地に生まれ変わったヤード跡地等々、隠れたポイントも知ることができた。大塚氏自身が『鉄道廃線跡を歩く（第9巻）』の中で執筆されている両本線を結ぶ“折尾接続線分岐点跡”も、実際に現地を見ながら解説を受けた。

この接続線は短絡線とも呼ばれ、上述のキロポストの東側の短絡線は、筑豊で産出

された石炭を若松だけでなく、直接門司へも輸送するため敷設されたもので、明治 26 年に完成している。100 年以上も経た今も、この短絡線は“福北ゆたか線”と愛称され、北九州と筑豊を結ぶ重要な役割を果たしている。それとは対照的に、鞍手（室木線）や三池・唐津など鹿児島本線沿線で産出された石炭を、若松へも直送していた、もう一方の西側の短絡線は廃線となり、築堤のみが残されている。この築堤は折尾駅 4・5 番のりばホームからも見ることができるが、ここに産業の移り変わりによる鉄路の盛衰がうかがわれる。

現在この地区は、北九州市が構想する「折尾地区総合整備事業」により、“未来をひらくまちづくり”が計画され大きく変化しようとしているが、それに伴い、文化財的価値がある折尾駅舎を筆頭に、多くの貴重な産業遺産や堀川運河なども消滅することはないかどうか、大いに危惧されるところである。



## 【報告】

日本産業技術史学会総会報告

市原猛志

(NPO法人北九州COSMOSクラブ)

日本産業技術史学会の総会が、去る 6 月 18 日（土）福岡県志免町総合福祉施設「シーメイト」で開催された。小会(KIAS)会員の中で、同会会員となっている者も多く、総会の開催に際しては小会もお手伝いさせて頂いた。午前中は会員による総会、ついで一般参加者も交えた研究発表大会が行われた。全国各地から博物館の調査報告や大学院生を含む専門家による発表が行われ、多様な産業技術の系譜に関して活発な意見交換が行われた。

昼食後最初のイベントはすぐ近くにある豎坑櫓の見学会。この日の見学会にはおよそ 30 名ほどの参加があり、日本最大の豎坑櫓の雄大さに感嘆の声がしきりだった。その後、地元住民なども交えて豎坑櫓の意義を考えるシンポジウムが行われた。夜は地元の研究者や活動家も交え和やかに懇親会が催され、この日の行事は幕を閉じた。



写真 1 志免炭鉱豎坑櫓

翌 19 日にはバス一台を借り切って、粕屋・筑豊地方の産業遺産の見学会が行われ、宮田町・直方市の両石炭記念館を始めとする炭鉱史跡群を見学した。途中飯塚市の嘉穂劇場で昼食をとる際には、小会会員の深町純亮氏から当劇場を取り巻く往時の筑豊の賑わいについての説明を受け、またその後の麻生邸（「筑豊御三家」のひとつ）の見学では、炭鉱主邸宅の優美な建築（外観のみ）や庭園を見ることが出来た。このような史跡が筑豊にまだ遺されていることに感銘を覚える。

さらに 20 日にはオプションツアーとして、長崎県池島炭鉱の周辺を散策した。炭鉱設備自体は当日構内の行事があったため、敷地内で見学することは出来なかった



が、九州で最後まで炭鉱で栄えた島のたゞずまいを見ることが出来た。

産業技術史学会が九州で初めて行われるということで地元の関心も高く、受け入れ態勢を整えるためにもということで、総会に先立って「志免立坑櫓を活かす住民の会」が正式に発足した。同会はその後も、九州各地で活動する産業遺産保存活用団体のネットワークを生かしながら、署名活動やシンポジウムの開催など、志免立坑櫓の保存運動に取り組んでいる。今後の更なる活動に期待したい。



写真2 飯塚柏の森・麻生邸



## 【報告】

九州の伝承遺産シンポジウム2005長崎  
幸田亮一（熊本学園大学）

8月21日（日）13時から長崎大学中部講堂（長崎市文教町）を会場として、標記のシンポジウムが開催された。司会はアナウンサーの島田啓子さん、出席者は若い人から年配まで約200人で、多様な人々が参加した。

まず「NPO 軍艦島を世界遺産にする会」理事長の坂本道徳さんから、伝承遺産の保存活用の運動を産官学民の協力で九州全体

に広げたい、との力強い挨拶が行われ、続いて来賓挨拶として、長崎市長挨拶が長崎市企画部理事の井川啓治さんによって代読された。長崎市はいま産業観光の振興に取り組んでおり、伝承遺産の役割が益々大きくなることから、このシンポジウムに期待する、とのことであった。次に長崎大学教授の後藤恵之輔さんから、軍艦島のビデオ上映と現状報告が行われ、自ら撮影されたビデオをもとに、タイムトンネルをくぐり抜けたような映像とともに、風雨にさらされ傷んだ建物の様子が映し出された。

この後、2つの基調講演に移った。まず東京電機大学名誉教授の阿久井喜孝さんから「軍艦島の近代建築の歴史的意味」について講演が行われ、軍艦島はわが国の鉄筋コンクリート建造物の歴史の中で、先駆性、高密度性、「ポンペイ」性（いきなり無人島化）という点で特異な位置を占め、公共性空間の工夫や柔軟な改善可能性という点も含めて、日本の近代化を考える絶好の素材である、との話があった。

工学院大学教授の後藤治さんの講演は「九州の産業遺産群を世界遺産に」というもので、文化庁で近代化遺産の保存に従事されてきた経験を踏まえ、日本では産業遺産を文化財と見る発想が弱いことや、企業所有のものが多きことなどの問題点を指摘された上で、近代黎明期の産業遺産が多数存在する九州が、世界遺産化を目ざしてクリアしなければならない課題（文化財指定など）を提示された。

続いて各地の伝承遺産の現状報告に移った。集成館事業の現状（鹿児島大学教授、長谷川雅康さん）、志免の立坑櫓の保存活用をめぐる動き（志免町議会議員、古庄信一郎さん）、熊本の産業遺産の状況（熊本学園大学教授、幸田亮一）、高島の地域おこし（NPO 軍艦島を世界遺産にする会理事、野崎祐一さん）、三池炭鉱の産業遺産の状況

(大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ理事長、中野浩志さん)などの報告が行われた。

しばらく休憩した後、後藤さんのコーディネートの下、パネルディスカッションが行われた。まず各アドバイザーから、産業遺産は素晴らしい教師である(阿久井さん)、産業遺産は社会的に利益を生み出す(長崎県立シーボルト大学教授、三藤利雄さん)、形あるモノは無くなるがその見守り方が大切だ(建築家、中村享一さん)、日本で更地優先となっているのはなぜか、古いモノをなぜ簡単に壊すのかを問うべきだ(後藤さん)などの助言が出された。これに対し、パネリストから各地の取り組みを踏まえた発言が行われ、またフロアからも質疑や意見が出された。

パネルディスカッションの総括として、後藤さんは、(1)ストーリーの発掘と子供達の参加をともし未来に伝承していくことが大切、(2)保存・活用のために必要な費用については先進国の方法も学び知恵を絞っていかねばならない、(3)個々バラバラではなく九州全体のネットワークの構築が必要で「九州伝承遺産機構」をめざす必要がある、(4)年数を経た建造物には最新の技術を用いることで安全性を確保することができる、(5)炭鉱を含め近代遺産の発掘調査も大切だ、の5点の整理を行った。この後、長崎大学工学部助手のアーメドサロワサさんより、観光資源としての産業遺産の重要性に言及した締めくくりの挨拶があって、17時40分に終了した。

驚嘆すべき「軍艦島を世界遺産にする会」のパワーにより、九州全域のヘリテージを視野に入れたシンポジウムが初めて開催された意義は大きい。引き続き来年はシンポジウムを熊本で開催してもらえないかとの要望が、事務局から寄せられた。会員にも呼びかけて鋭意努力したい。

## 【産業遺産】

宝珠山の炭鉱遺産 いぶき館

青地学(雇用・能力開発機構)

飯塚市と日田市を結ぶ国道211号線は、峠道ながらも焼き物の里として知られる小石原を經由することから、北九州在住の方には通られた方も多いと思われる。筆者もその一人だが、その小石原と日田との間にある宝珠山に、かつて炭坑があったことを知ったのは、つい最近のことである。

その宝珠山炭坑は、「筑豊の石炭王」と呼ばれた伊藤伝右衛門が明治45(1912)年に買収して昭和15年まで経営し、その後経営者の変遷を経て昭和38(1963)年に閉山した。

伝右衛門は飯塚市の邸宅(いわゆる旧伊藤邸)の一部を、昭和8年頃に宝珠山炭坑の第2坑近くに移築して、それを幹部用施設「宝珠山炭坑クラブ」として利用した。その建物こそ、現在この国道沿いに見られる図1「いぶき館」である。ただし場所は元のままではない。その経緯を簡単に説明する。



図1 いぶき館(旧宝珠山炭坑クラブ)

炭坑クラブは閉山後の昭和44年に旧第1坑近く(現在地)に移築され、長らく料理旅館「ほうしゅ山荘」として営業されていた。それも平成12(2000)年に廃業となったことから、この歴史的建物の去就が注目された。宝珠山村(当時)の人々は、産炭地の歴史を伝える貴重な産業遺産であると

して、村がこれを買収し、その保存と活用のために衆智が集められた。その結果、建物は同地のまま復元工事を施されたうえ、「山村文化交流の郷」として活用されることになった。それが今年春開館したこの「いぶき館」である（なお宝珠山村と小石原村は今春合併し東峰村となった）。

館内は建物自体が貴重であるのに加えて、炭坑や地域の歴史が展示され、ビジターセンター、交流サロンとしても利用されている。炭坑の展示は映像、パネル、実物を用いて分かりやすいものになっており、特に伝右衛門と妻の柳原白蓮に関わる展示が興味を惹いた。筆者の見学の際には樋口館長に丁寧な案内をいただいた。開館準備にあたっては当会(KIAS)の先輩会員の協力も得たとの話を強くした。

建物に隣接して図2のような秀逸な坑口が存在しており、今や現存するのは珍しい炭坑施設を手軽に見られる場所となっている。12月の当会例会での見学会には是非ご参加いただきたい。



図2 第一坑坑口

住所：福岡県朝倉郡東峰村大字福井2296-1（最寄駅：JR 日田彦山線「大行司」駅） 電話 0946-72-2232 開館時間：10時～17時 入館料：大人300円 休館日：毎週火曜日（祝日の場合は翌日） 年末年始

## 【お知らせ】

「志免の文化財ウォーク」開催

平成17年度福岡県ふるさとの文化遺産活用推進事業の一環として、志免町で炭鉱遺産の各所を巡るイベントが開かれます。

日時：11月3日（祝） AM9:15 集合

集合場所：シーメイト（志免町総合福祉施設）前駐車場

コース：志免鉄道記念公園 第八坑連卸坑口 ポタ山 豎坑櫓 志免町産業遺産収蔵庫

なお午後には「不禰国ウォーク」と題して、近郊の古墳を巡る予定です。

雨天の場合、シーメイトにて歴史講座が行われる予定です。多くの方のご参加を心よりお待ちしております。



## 【お知らせ】

新役員について

平成17・18年度役員は以下のように決まりました。

会長：木元富夫

副会長：大石道義

事務局長：青地学

編集担当：清水憲一

編集担当：市原猛志

企画担当：砂場一明

企画担当：池森寛

庶務担当：松田寛

監査担当：山田元樹

今後とも九州産業考古学会をどうぞ宜しくお願いいたします。

< 会報第5号・目次 >

【巻頭言】

九州で産業考古学を学ぶ 挨拶	事務局長就任 青地学 1	日本産業技術史学会総会報告 市原猛志 8
-------------------	-----------------	-------------------------

【研究発表】

動態保存されている農用小型木炭ガス機関 小林式サクシオンガス機関	池森寛 2	九州の伝承遺産シンポジウム 2005 長崎 いぶき館～宝珠山の炭坑遺産～ 幸田亮一 9
-------------------------------------	-------	---

【報告】

2005 年度総会および見学会	松田寛 6	「志免の文化財ウォーク」開催 1 1
折尾界隈の鉄道史を見る	砂場一明 7	新役員について 1 1
		今後の予定 1 2

(お知らせ内の各イベントは、頁末の当会ウェブサイトからもご確認ください)

今後の予定

当会の今後の予定は以下の通りです。

月・日	活動内容
1 1月3日	「志免の文化財ウォーク」
1 2月	例会(宝珠山炭坑遺産見学)
1月	
2月	
3月	見学会(九州大学近代建築)
4月	会報第6号発行

【予定は都合により変更される事があります】

会費納入・ご寄付のお願い

当会は事務局体制や会報を充実させるため、今後は会則により年会費を個人会員2000円、団体会員は5000円徴収させて頂く事になりました。当会の趣旨をご理解頂き、会費納入またはご寄付を宜しくお願いいたします。

寄付受付口座

福岡銀行大牟田支店 (店番691)

普通 1914369

九州産業考古学会

< 編集後記 > まず編集部の不手際から第5号の発行が遅れてしまったことを会員各位にお詫び申し上げます。遅延の原因となつたいくつかの問題点のうち、一番の問題は私の怠慢に他ならないが、事務局に人手が足りないことも一因ではないか。学術的な会報の編集ということで、なかなか難しい問題ではあるが、当面はスタッフ各人の努力でカバーするしかない。(市原)

九州産業考古学会事務局 〒 807-0022 福岡県遠賀郡水巻町頃末北4丁目 11-7-204 青地学 気付  
TEL&FAX : 093-202-5054 E-mail : aochimanabu@yahoo.co.jp  
URL : http://cgi.f17.livedoor.ne.jp/~heritage/